

ダンの融和への訴え

ドイツ派遣（1619年5月-12月）に関連して

竹永雄二

1

1619年、イギリスの外交使節団はドイツへと派遣された。使節団の目的は30年戦争の発端となった1618年の「プラハ王宮窓外放出事件」(Defenestration of Prague) 以来、カトリック統一を強める神聖ローマ帝国 (Holy Roman Empire) と、それに反発するボヘミア国 (Bohemia) を中心とするプロテスタント勢力の武力衝突を回避し、和平を実現することであった。ダン (John Donne, 1572-1631) は国王命で使節団説教師として随行することになった。本発表では、30年戦争前半の展開と関連付けながら、ダンのドイツ派遣前後の詩、散文に焦点を当て、ダンが融和の重要性を訴えていったことを述べる。

1613年、ジェイムズ一世の娘エリザベス (Elizabeth of Bohemia) は、ドイツ・プロテスタントの急進派であったプハルツ選帝侯フレデリック (Frederick V, Elector Palatinate) と結婚している。ダンは『祝婚歌』を書き、その中で彼女のことを「不死鳥」と賛美している。Francis Yeats がシェイクスピアの後期の作品に指摘したように (3-35)、ダンもまたこの祝婚歌に英国の未来への希望、愛国心を込めていると考えられる。

渡航前に法学院で行われた『ドイツ行きに際しての別れの説教』には、ヨーロッパの緊迫した政治状況に触れた部分があり、「平和の王国」英国から、「野心から剣を振るう国」神聖ローマ帝国と「野心の迫害への防衛のため剣を振るう国」ボヘミア国とが対立するドイツへの旅となることが述べられている (2, 248-9)。

2

1619年5月、イギリス使節団はドイツへ向けて出発し、6月にダンはハイデルベルグ (Heidelberg) で説教を行っている。だが現存する説教について疑義がある。主賓への言及が無いこと、テキスト「救済は信じていたよりもっと近づいている」(『ローマ信徒への手紙』13.11) が慣例では「降臨祭」(Advent) に使われること、さらにカルヴァン主義批判の箇所があることを理由に、Evelyn Simpson 及び R. C. Bald は別の説教に見出しが誤って印刷された可能性を指摘している (2, 36-7; 352)。だがダンは「救済の接近」を説くために、和平交渉に関連した表現「休戦」(truce)、「和平」(peace) 等を意図的に使用している。また救世主の誕生はすべての宗派に共有された歴史的事実としている。ダンはキリスト教の根本が救済にあることを強調することで、融和の重要性を訴えているように思われる。同年12月のハーグ (The Hague) での説教まで情勢は大きく動いている。8月、プハルツ選帝侯はボヘミアのプロテスタント勢力の強い要請を受け国王即位を受諾し、その翌日、カトリック同盟の盟主であるフェルディナンド (Ferdinand II) は神聖ローマ帝国皇帝に選任され、和平交渉の可能性は消滅した。このような状況下で、ダンは『人間を獲る漁師』(fishers of men) にしよう」(『マタイ伝』4.18-20) をテキストとし、ガリラヤ湖 (the Sea of Galilee) で漁をするピーター (Peter) とアンドルー (Andrew) 兄弟の結束力、純粋な信仰心、キリストの福音という網を現実世界という海に投げ続ける、使徒としての使命への献身性について説教を行っている。国際的な政治状況の変化にもかかわらず、使徒の使命というキリスト教の根本を論じることで、ダンは分裂を回避し融和回復の重要性を訴えていると思える。

Annette Deschner によれば、17世紀に入り、ヨーロッパではキリスト教間の分裂・対立を回避するために、融和主義 (Irenicism) の運動が広まりつつあった。融和主義の一つの主張は、分裂前のキリスト教の根本に帰することであった (293-312)。ダンのハイデルベルグ、ハーグの説教は、広い意味で融和主義運動の流れの中に位置づけられると思われる。

3

1619年末、使節団は帰国する。1621年末、「ホワイテ・マウンテンの戦い」 (the Battle of White

Mountain) でプロテスタント連合は敗北した。この報が伝わると、ロンドン市民の間に大きな動揺が広まり、ジェームズ 1 世の宥和政策を批判し、軍事支援を求める過激な意見が起こったとき、ダンは「人をつまずかせるこの世に災いあれ」(『マタイ伝』 18.7) をテキストにして説教を行い、「嵐」を乗り切るための忍耐力、さらにノアの方舟の同乗者という喩えでプロテスタント教徒同士の同胞愛の重要性を説き、ロンドン市民に平静さと自制、融和につながるより大きな人間愛を求めている (3, 184-5; 185)。Helen Gardner が明らかにしているように、「聖なるソネット 18」(*Holy Sonnets 18*) は、このホワイト・マウンテンの戦いでの敗北と強く結びついた詩であることは間違いない (121-27)。様々な解釈はあるが、ボヘミアの敗北という歴史的コンテキストから見れば、結びのカプレット、「キリストの花嫁である教会は全ての人に扉を開くとき、キリストにとって、最も真実で好ましい」 “Who is most trew, and pleasing to thee, then / When she’s embrac’d and open to most men.” (ll. 13-4) という大胆なレトリカルな表現に、現実の教会の分裂と排除を超えた、全ての人に開かれた真の教会を希求するダンの悲痛な訴えを聞き取ることができるのではないだろうか。

1622年、神聖ローマ帝国軍の攻撃によりハイデルベルグが陥落し、プハルツ選帝侯夫妻はハーグへと亡命した。これまであまり注目されることのなかった「旧約聖書『哀歌』のトレメィウス (Tremelius) によるラテン語訳のダンの英訳」には、Mary Papazian が詳細に論じているように、バビロン捕囚によるエルサレムの破壊に、古都ハイデルベルグ陥落へのダン自身の深い悲しみが投影されていると思われる (235-66)。

1623-4年、ダンは闘病記『緊急時の信仰』(*Devotions upon Emergent Occasions*) という散文作品を書く。発病から回復までの病状の変化を考察したもので、病床からの説教とも評されている。この作品の中で有名な「人間は島ではなくて、大陸の一部である」で始まり、全ての人間は一つの共同体であることを説く一節は、ダンのドイツの旅の一つの結実だと思える。この作品はこの時ハーグで亡命生活を送っていたエリザベスに献呈されている。重病からの奇跡的回復という個人的経験にボヘミア及びプハルツ国の復活へのダンの願いが込められていると思われる。またほぼ同時期の説教の一つで、救済が東西南北のすべての教会の無数の人々に及ぶという『黙示録』の一節をテキストとし、ダンも、様々な違いを超えたキリストの無限の愛、救済が新約聖書に一貫することを示そうとしている。

死の前年である1630年、ダンも病氣療養中、それまで行った説教の整理をした。「メモ書きを改訂し、二部に分類した」と見出しに示されているように (2, 269)、先に考察したハーグでの1619年の説教は正確に言えば1630年の改訂版という方が正しい。両者の違いは不明であるが、筆者には「万人教会」(*Catholic Church*) についての一節「教会はカトリックという名前を愛する。それは栄光に満ち、調和した名前である」 (2, 280) は後に加筆されたように思われる。そこにダンの融和への願いが読みとれるのではないだろうか。全ての人に開かれたキリスト教会を希求するダンの同胞愛、隣人愛を示すものではないだろうか。この一節はダンの作品の一つの到達点であり、ドイツ派遣がもたらした大きな意義だと考えられる。

引用文献

Bald, R. C., *John Donne: Life, Mind and Art* (New York and Oxford: Oxford University Press, 1981)

Deschner, Annette, “Reforming Baptism: John Donne and Continental Irenicism” in *John Donne and the Protestant Reformation: New Perspectives*, ed. by M. A. Papazian (Detroit: Wayne State University Press, 2003), pp. 293-313

Donne, John, *The Sermons of John Donne*, ed. by George R. Potter and Evelyn M. Simpson, 10 vols (Berkeley & Los Angeles: University of California Press, 1953-62)

——, *John Donne: the Divine Poems*, ed. by Helen Gardner, 2nd edn (Oxford: Clarendon Press, 1978)

Papazian, Mary Arshagouni, “John Donne and the Thirty Years’ War”, *JDJ*, 19 (2000), pp. 235-66

Yeats, Francis A., *Shakespeare’s Last Plays: A New Approach* (London: Routledge & Kegan Paul, 1975)